

宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編第40話

連綿と続くハプスブルグ家 オーストリア

ウィーンはフィレンツェと並んで芸術の香りの高い街である。フィレンツェがメディチ家の本拠地であったように、ここウィーンは連綿と続いたヨーロッパの名家ハプスブルグ家の本拠地である。ハプスブルグ家は11世紀ごろ、スイス東北部からアルザス地方に端を発する貴族であったが、その歴史は、1273年ルドルフが選帝侯によって神聖ローマ皇帝に選ばれたことに始まる。

ルドルフの長男のアドルフは1308年スイスで暗殺され、そして1315年スイスが独立しハプスブルグ家の本拠はスイスからオーストリアのウィーンに移った。

ルドルフ以降、神聖ローマ皇帝に選ばれることを久しく待ち望むも、選んでくれる選帝侯の眼鏡にかなわず130年後にやっと選ばれたのがアルブレヒト二世であるが即位間もなく病死し、子供のフリードリッヒ三世が引き継ぎ、以来次第にハプスブルグ家はヨーロッパの巨大な勢力となっていくのである。

神聖ローマ帝国とは東フランク（＝ドイツ）の王オットー一世が、ローマ帝国を復興しようとローマ教皇ヨハネ12世を周辺の敵国から守り助けたことに対し、962年教皇がオットー一世にローマ皇帝の冠を授けたことによって、超国家的権威である神聖ローマ帝国がはじまったのである。

また選帝侯とは三人の聖職者と世俗君主ボヘミア王・ザクセン王等4名、都合7名で構成され神聖ローマ皇帝を選び決定する人達である。

神聖ローマ帝国皇帝に選ばれたハプスブルグ家のフリードリッヒ3世は、選帝侯はじめとする人々の目からすると風采のあがらない無力の人と思われていたが、それが選ばれた最大の理由だと言われている。だが彼は非常に長命で誰もが予想していなかった53年間も皇帝の座にあったのである。フリードリッヒ三世は結婚7年目にしてやっと待望の王子を授かる。後の皇帝マクシミリアン一世である。マクシミリアン一世は見目麗しく、当時ヨーロッパにおいて最も富裕なブルゴーニュ公国のシャルル公の一人娘マリアを娶った。

ブルゴーニュ公国はフランスとは敵対関係にあった、ハプスブルグ家は婚姻によって、その後400年に渡ってブルボン家などフランス王家との関係に敵対することとなった。

マクシミリアン一世は妻のマリアを落馬事故で亡くすと公国の各所で反旗が翻ったがマクシミリアンはこれに対し敢然と立ち向かい勝利していく。

この頃オーストリアの隣国ハンガリーの王であるマーチャーシュは、オスマン帝国の後ろ盾を得てウィーンへ進軍してくる。しかしウィーンを守るべき君主フリードリッヒ三世はいちはやく難を避けてしまい、マーチャーシュ王はウィーンを占領してしまう。



ウィーン市遠望とシェンブルグ宮殿

メフメット二世率いるオスマントルコは、ヨーロッパ全域に大きな衝撃を与え、その結果これまで神聖ローマ皇帝は7人の選帝侯が弱小国家から選んでいたが、このような情勢下

で国家を防衛することが皇帝に課せられた役割の第一に掲げられるようになりマクシミリアン一世が、父フリードリッヒ三世に変わって若干26歳であったが1486年神聖ローマ皇帝に選定された。父親フリードリッヒ三世が亡くなり喪の明けぬ中、マクシミリアン一世は周囲の反対を押し切りミラノのスフォルツァ家（先祖は靴屋から傭兵隊長となった）のビアンカと再婚する。

結婚によってハプスブルグ家は莫大な財を手に入れた。ハプスブルグ家は婚姻関係をうまく操り有力な家系と繋がり領土を拡張し権力を手にしていったのである。

マクシミリアン一世の二人の子供は、スペイン王の王子と王女と結婚する。ところがスペイン王家は一人を残し王家の縁者は死去してしまい、結果として期せずしてハプスブルグ家が王位を継承することとなり、マクシミリアン一世はネーデルランド、ボヘミア、ハンガリー等を同家の領地に加えることとなった。

1516年マクシミリアン一世の孫であるスペイン王カルロス一世（=ハプスブルグ家ではカール5世）が神聖ローマ皇帝を兼ねた結果ハプスブルグ家はドイツおよびスペインを支配することとなった。

カルロス一世は広大な領土統治をどうすべきか考え、ドイツとオーストリアの帝位を弟のフェルディナンド一世に譲り渡した。一方のスペイン、ネーデルランド、ナポリの他海外に持っているメキシコなどの領地は、子供のフェリペ二世に譲り退位した。

ここにハプスブルグ家はオーストリア系とスペイン系の二つに分かれ、両系ともヨーロッパのリーダーとして君臨していくのである。

スペイン系はスペイン、ミラノ、ナポリ、シチリア、ネーデルランドや新大陸。オーストリア系はオーストリア、ハンガリー、ボヘミアなどを治めた。

スペイン系のフェリペ二世は、キプロス・マルタを占領し、オスマントルコの艦隊にレパント沖（ギリシャ）の海戦で勝利し、ここにスペインは地中海の覇権を確立した。またフィリッピンやポルトガルをも傘下に置いている。

1700年スペイン系のハプスブルグ家のカルロス二世は知的障害がありその死によって断絶し、遂にスペイン王位をブルボン家に渡さざるを得ない事態に立ち至っている。

17世紀の終わりごろレオポルド一世が皇帝に就いたが政治的には著しく能力を欠いていた。1683年トルコ軍の第2次ウィーン包囲の時、レオポルド一世は帝都ウィーンを見捨てて逃げ出してしまいう有様であったが、救援に駆け付けた友軍のお陰で事なきを得た。レオポルド一世は仕官を申し出たオイゲン公の非凡な才を見抜き自軍の将軍にすえた。オイゲン公はトルコ軍を追い詰め勝利し、



マリア・テレジア像

ハプスブルグ家の繁栄に大いに貢献した。

レオポルド一世が死去し、高い能力を備えた長男ヨーゼフが後を継ぐも33歳の若さでこの世を去り、次男のカール6世がその跡を継いだ。オーストリアハプスブルグ家は1740年カール6世が男子の子を残さないまま死去したため神聖ローマ皇帝の地位を失ったが、オーストリアは長女のマリア・テレジアが若干23歳で相続した。異を唱えるプロイセンとの争いもあったが1748年オーストリア、ボヘミア、ハンガリーの相続を認められる。彼女は軍を強くするための諸策に取り組むほか、医療や教育さらに有用な人材の登用など様々な分野の改革を積極的に行った。

またマリア・テレジアはプロイセンの勢力の伸長を危惧しハプスブルグ家が長年争い続けて来たフランス王国と外交革命と称されるような画期的な方向転換を断行した。そしてフランスの王ルイ16世に末娘マリー・アントワネットを嫁がせたのであるが、1789年に勃発したフランス革命によりルイ16世とマリー・アントワネットは断頭台で処刑されてしまう。

マリア・テレジアは夫フランツの間に16人の子をなした。最愛の夫が他界して以来、自身が1780年シェンブルン宮殿で死去するまで、喪服を脱ぐことはしなかったと伝えられている。

長男のヨーゼフ二世がオーストリア皇帝を引き継ぎ、富国強兵を指向した。ヨーゼフ二世と弟レーオポルト二世は、ハプスブルグ家の御家第一とする君主観とは異なる国民を幸福にすることが君主の務めとする君主観を主張した。兄ヨーゼフ二世の逝去によりレーオポルト二世が後を継ぎ英邁な皇帝と期待されるも早世してしまう。

オーストリア系ハプスブルグ家は、1806年にフランスのナポレオンによって神聖ローマ帝国が解体されるまで皇帝の地位をほぼ独占していたが、その地位を失いはしたがハプスブルグ家は、引き続きオーストリア帝国の皇帝として君臨する。

19世紀初頭のウィーン会議は、ナポレオン・ボナパルトの戦争によって引き起こされたヨーロッパ諸国の秩序回復を目的に、ヨーロッパの関係国の代表がウィーンに参集した国際会議である。

1814年9月から翌年6月まで延々9カ月に及ぶ小田原評定となり、主催したオーストリアのメッテルニヒ首相は参集した各国の代表の意見の一致を見るまで舞踏会や音楽会を催すなど会議の運営に苦慮し「会議は踊るされど会議は進まず」などと揶揄された。

スイスはウィーン会議を契機として永世中立国となった。ヨーロッパに吹き荒れる民族の独立運動は日増しに激しくなっていく。

ハプスブルグ家の皇帝であるフランツ・ヨーゼフは、ノイシュバンシュタイン城を造ったルートヴィッヒを輩出したバイエルン王家からエリザベートを娶った。そして王子ルドルフを授かったもののルドルフは自殺してしい、また王妃エリザベートもレマン湖畔で無政府主義者に暗殺される不幸に見舞われた。

だが不幸はこれに留まらず、1914年皇位継承者である甥のフランツ・フェルディナンド夫妻がボスニアの州都サラエヴォでセルビア人に暗殺されてしまう。世にいうサラエヴォ事件であるが、この事件を契機としてオーストリアがセルビアへ宣戦布告したことにより第1次世界大戦が始まった。ハンガリーもオーストリアから独立するなど帝国内の民族が一斉に独立の機運を高めていった。1916年フランツ・ヨーゼフは、84歳の生涯を閉じることによってハプスブルグ家は実質的に幕を閉じたが、ハプスブルグ家の王朝支配は1918年カール一世の退位宣言とともに完全に終わったのである。

ハプスブルグ家はスイスのバーゼル付近を発祥地として、13世紀から20世紀に至る延々650年間もヨーロッパに君臨し続けたのである。

余談ながらハプスブルグ家は所領の維持や血統を重視するため、血族結婚が幾度も重ねられその結果一族には虚弱体質や知的障害者が多く生まれ、ハプスブルグ顎と称される下顎前突症など障害を持つものが多く生まれた。

長引くウィーン会議でメッテルニヒが、飽食の列強の代表をもてなすために自身の料理人フラン



ウィーン市内にある
モーツアルト像

ツ・ザッハーに作らせたデザート「ザッハートルテ」は大評判となり今日でもウィーンの優雅なホテル・ザッハーで味わえるし、日本からも発注できる。またかつて門外不出であったレシピは公となっている。

ウィーンはハプスブルグ家がいつくしんできた都市空間である。かつて幼いモーツアルトが王家のマリー・アントワネットに向かって大きくなったら僕の嫁にしてあげるよといったほほえましいエピソードが今に語り継がれるような優雅な宮廷都市である。